



菅野正彦教授近影

略歴

菅野正彦

1935年7月16日 広島県三次市に生まれる。

学歴

1954年3月	広島県立塙町高等学校卒業
1954年4月	広島大学文学部文学科(英語・英文学専攻)入学
1958年3月	同上卒業
1958年4月	広島大学大学院文学研究科修士課程(英文学専攻)入学
1960年3月	同上終了
1960年4月	広島大学大学院文学研究科博士課程(英文学専攻)進学
1963年3月	同上単位修得

職歴

1962年12月1日	岐阜薬科大学助手
1964年4月1日	岐阜薬科大学講師
1965年10月1日	岐阜薬科大学助教授
1969年3月31日	同上退職
1969年4月1日	愛知教育大学助教授
1972年6月1日	愛知教育大学教育学部助教授(名称変更)
1977年4月1日	愛知教育大学教育学部教授

1980年4月1日 愛知教育大学大学院
英語教育研究科(担当)

1985年5月6日 文部省在外研究員
1986年3月5日 (連合王国シェフィールド[Sheffield]大学)
1994年4月1日 愛知教育大学附属高
1997年3月31日 等学校長(兼任)
1999年3月31日 愛知教育大学停年退
官

研究業績一覧

著書

1996.3	<i>STUDIES IN CHAUCER'S WORDS : A Contextual and Semantic Approach</i> (Tokyo : Eihōsha)
1997.5	『チョーサーの言葉—文脈的・意味論的研究』 (東京 : 英宝社)
1998.10	<i>WORD AND DEEDS : Studies in Chaucer's Words</i> (Tokyo : Eihōsha)

論文

1962.1	A Joint Study of the Language of <i>The Paston Letters</i> (共) 「広島大学文学部紀要」20
1963.6	Some Characteristics of the Verbal Substantive in Gower's <i>Confessio Amantis</i>

- 「英語英文学研究」9
 (広島大学英文学会)
- 1964.11 *Confessio Amantis* の表現
 「岐阜薬科大学紀要」14
- 1964.12 *Confessio Amantis* における対
 句表現
ERA 3 (広島英語研究会)
- 1965.11 Syntax of the Infinitive in
 Gower's *Confessio Amantis*
 「岐阜薬科大学紀要」 15
- 1965.11 *Havelok the Dane* の言語と表現
 「同上」 15
- 1966.3 *Havelok the Dane* における反
 復的表現について
PHOENIX 3
 (広島大学文学部英文研究室)
- 1966.11 *Confessio Amantis*—Prologue
 「岐阜薬科大学紀要」 16
- 1966.11 Syntax of the Infinitive in
 Gower's *Confessio Amantis* II
 「同上」 16
- 1966.11 The Expanded Tenses of S.
 Maugham
 「同上」 16
- 1967.11 Verbs in John Gower's *Confes-*
sio Amantis
 「同上」 17
- 1968.11 Prepositions in Gower's *Confes-*
sio Amantis
 「同上」 18
- 1970.3 Negative Affixes in *Confessio*
Amantis
- 「愛教大研報(人)」 19
 1971.11 Gower の語彙について
 「外国語研究」 9
- 1973.3 Gower のフランス系語彙—形
 容詞
 「同上」 10
- 1974.2 Interrogative Pronouns in *Con-*
fessio Amantis
 「愛教大研報(人)」 23
- 1976.3 Gower の「史的現在」
 「同上」 25
- 1978.3 *Confessio Amantis*— 作品と文
 体について
 「同上」 27
- 1979.12 Chaucer の表現の微妙さ—二つ
 の視点
 「英語英文学研究」 24
- 1980.3 Gower と Chaucer
 「愛教大研報(人)」 29
- 1980.3 *The House of Fame* の意味
 『英米文学語学研究—
 吉田弘重先生退官記念』
 (篠崎書林)
- 1982.2 *The Canon's Yeoman's Tale* に
 おける “craft” の意味
 「外国語研究」 18
- 1983.1 *The Pardonner's Tale* における
 「袋」と「聖遺物」の関係
 「愛教大研報 (人)」 32
- 1983.2 *The Franklin's Tale* : Aurelius
 の “gentillesse”
 「外国語研究」 19
- 1983.3 *The Miller's Tale* と *The Reeve's*

- Taleとの用語の差異
「教科教育センター研報」7
1983. 4 Gower の良識
『英語英文学研究－
柳井迪夫先生退官記念』
(研究社)
- 1983.12 *Glenyng Here and There*
『英語学論集』(金星堂)
1984. 1 *Glenyng Here and There* (II)
「愛教大研報(人)」33
1984. 2 Mancipleの意図
「外国語研究」20
1985. 2 Chaucer の *The Physician's Tale*－類話との比較
「同上」21
1987. 2 *The Shipman's Tale* のアイロ
ニー
「同上」23
- 1987.10 *The Man of Law's Tale* :
Transformation of Alle into Alla
『英米文学語学研究－
松本寛先生退官記念』(英宝社)
1988. 2 Colour Terms in *The Nun's Priest's Tale*
「愛教大研報(人)」37
1988. 3 The Shift of Meaning in *The Miller's and The Reeve's Tales*
「外国語研究」24
1989. 3 チョーサーと修辞学
「外国語研究」25
1989. 8 Lexis and Structure in *The Canon's Yeoman's Tale*
IN GEARDAGUM X : Essays
- on Medieval English Language
and Literature (Denver)
1990. 2 Chaucer の修辞法－反復と対照
「愛教大研報(人)」39
1990. 3 *Troilus and Criseyde* の
“unkynde”について
「外国語研究」26
1990. 6 Word and Deed in *The Pardoner's Tale*
SMELL, No.5
(日本中世英語英文学会)
1991. 2 “Werre and Pees” —*The Tale of Melibee*
「愛教大研報(人)」40
1991. 3 A Note on the Verbal Association in *The Miller's Tale*
「外国語研究」27
- 1991.12 *The Franklin's Tale* : Transformation of Aurelius
Language and Style in English : Essays in Honour of Michio Masui (Eihōsha)
1992. 2 *The Clerk's Tale* — “Sad” とその類語
「愛教大研報(人)」41
1992. 3 *The Physician's Tale* : Distorted Sense of Justice
「英語英文学研究」36
(広島大学英文学会)
1992. 3 *The Tale of Melibee*— Prudence's Profitable Advice
「外国語研究」28
1992. A Note on Repetition and Con-

- trast in Chaucer
- Theoretical and Descriptive Studies of the English Language* (Seibido)
- 1992.6 *The Shipman's Tale—A Semantic Approach*
『英詩評論』(広島・丸善)
- 1993.2 *The Friar's Tale—'hunting imagery'*
「愛教大研報（人）」42
1993. *The Manciple's Tale : The Manciple's Warning*
『英語英文学研究－河井迪男先生記念論文集』(英宝社)
- 1994.2 *The Summoner's Tale* の覚書
「愛教大研報（人）」43
- 1994.3 Chaucer の独創性
「外国語研究」30
- 1995.2 “Penaunce” in *Troilus and Criseyde*
—meaning and context—
「愛教大研報（人）」44
- 1995.3 *Troilus and Criseyde* —植物のイメージ
「外国語研究」31
- 1995.5 “Sad” in *The Clerk's Tale*
SENTENTIAE (北斗書房)
- 1995.9 “Unkynde” in *Troilus and Criseyde*
『ことばの地平—英米文学・語学論文集』(英宝社)
- 1996.3 Chaucer の “debonaire” について
- 「愛教大研報（人）」45
- 1996.3 Some Verbal Features in *The Summoner's Tale*
「外国語研究」32
- 1996.10 Ring and Brooch in *Troilus and Criseyde* : Their Significance as a Token of Fidelity
Claritas, Vol.10
愛知教育大学英文学会
- 1997.3 A Note on Some Pregnant Words in Chaucer
「愛教大研報（人）」46
- 1997.3 Chaucer's Conception of Originality :
Essays on English Literature and Language in Honour of Shun'ichi Noguchi
(Tokyo : Eihōsha)
- 1997.3 Four Significant Words in Chaucer
「外国語研究」33
- 1997.7 A Note on Humour in *The General Prologue*
「英語と英語教育」2
(中谷喜一郎先生退官記念論文集) 広島大学学校教育学部英語研究室
- 1997.10 “A sodeyn love” in Chaucer's *Troilus and Criseyde*
Claritas, Vol.11
愛知教育大学英文学会
- 1997.12 “Penaunce” in *Troilus and Criseyde* :

<i>Medieval Heritage : Essays in Honour of Tadahiro Ikegami</i> (Yushodo)	同 上	同 上
1998. 2 Chaucer's View of "Mesure" : <i>Love of Words : Philological English Studies in Honour of Akira Wada</i> (Eihōsha)	1976.11 シンポジアム：英語学部門Ⅱ英文学への言語的アプローチ： Gower の言語表現	日本英文学会第29回九州大会 熊本大学
1998. 3 Chaucer and the Horse 「愛教大研報（人・社）」47	1977. 7 <i>The House of Fame</i> の意味するもの	広島英語研究会 広島大学
1998. 3 <i>The Parson's Tale</i> 覚書 「外国語研究」34	1979.10 シンポジウム：チョーサーをめぐって	日本英文学会第32回九州大会 西南女学院短期大学
1999. 3 Gower's Good Sense 「愛教大研報（人・社）」48	1980.10 シンポウジアム：中世における英語と文学の関係—F.N.Blake, <i>The English Language in Medieval Literature</i> 1977 をめぐって「チョーサーの語」	中世英文学研究会 同志社大学
研究発表		
1961.10 John Gower の <i>Confessio Amantis</i> における動名詞の統語法 日本英文学会第14回中四国大会 愛媛大学	1981.10 <i>The Franklin's Tale</i> の "gentillesse"	広島英語研究会 広島大学
1963. 3 Expression of Gower's <i>Confessio Amantis</i> —'simplicity' とその効果 広島大学英文学会 広島大学	1985. 2 Chaucer の <i>The Former Age</i> とその原典 愛知・岐阜・三重三県英語学談話会 名古屋大学	
1963.10 F.W.Bateson : <i>English Poetry and the English Language</i> 愛知・岐阜・三重三県英語学談話会	1986. 7 Sheffield の中世英文学 中世英語英文学会東支部 青山学院大学	
1972. 7 Gower の "Tale of Florent" について 広島英語研究会 広島大学	1986. 7 Sheffield の中世英文学 広島英語研究会 広島大学	
1975. 7 Gower の 'Historical Present' 同 上 同 上	1987. 5 <i>The Nun's Priest's Tale</i> の色彩語	
1976. 7 Gower 研究をめぐって		

日本英文学会（第59回）	1995.6 チョーサーの語について (特別講演)
中央大学	日本中世英語英文学会・西支部 大阪大学
1987.11 <i>The Miller's Tale</i> と <i>The Reeve's Tale</i> に見られる言葉の差異について	1997.11 <i>De Miseria Condicionis Humane</i> とチョーサーの <i>The Man of Law's Tale</i> と <i>The Pardoner's Tale</i> について
日本中世英語英文学会 早稲田大学	第23回チョーサー研究会 慶應大学日吉校舎
1990.4 Chaucer の反復語 — “unkynde”を中心には—	1998.5 シンポジウム「チョーサーの <i>The Parson's Tale</i> を巡って」 日本英文学会（第70回） 京都大学
日本中世英語英文学会・西支部 神戸市外国語大学	1998.6 シンポジウム「ロマン派の詩人達と中世」 中国四国ロマン派学会 KKR広島
1991.11 シンポジウム：14-15世紀英文学の語彙 「Gower の語彙—‘Nature’とその関連語」	
日本中世英語英文学会 広島修道大学	
1992.4 <i>The Friar's Tale</i> における ‘Hunting Imagery’ 第1回チョーサー研究会 青山学院大学	
1993.5 Symposia：中世英文学における 伝統と創意—Chaucer の独創性 日本英文学会（第65回） 東京大学	
1993.11 “Debonaire” in Chaucer and Gower 第7回チョーサー研究会 成城大学	
1995.5 Chaucer の言葉の意味領域 — “Debonaire”を中心には— 日本英文学会（第67回） 筑波大学	

菅野先生との思い出

杉 浦 正 好

1999年3月末に菅野教授が停年を迎え、外国語教室の「良き一時代」が去ってしまった感がする。この教室の名実共に大黒柱であったというのが残された外国語教室教官一同の痛切な思いである。

大学の授業や多忙な校務の間に、次々と上げられた先生の学問的業績については、英語学のチョーサーの専門家、それに先生に育てられた若き学究に委ねることにして、私のような門外漢は、ここでは私的な回想に終始することをお許し願いたい。

私は菅野先生から本大学で教えを受けた最初の世代であることを誇りに思っている。1969年4月、大学3年生の頃であった。今でも、岡崎にある古風な木造教室に颯爽と登場した若き学者の姿を鮮明に覚えている。しかし、近寄り難いところはあるでなく、どことなく気を許せそうな兄貴的な雰囲気をも漂わせていた。当時から、学問、学生、それに酒を愛した情熱の師であった。しかし、その溢れる情熱は今だに少しも衰えていないようである。

学問は言うに及ばず、卓越した人格者でもある。学会でも要職を勤められたが、少しも偉ぶったところがない。先生は誰に対しても常に對等な扱いをする。教え子でもある私に対しても、自分の意見を押し付けることは決してなかった。期待には程遠い私であったが、忍耐強く、育て

るつもりで温かく見守ってくれた気がする。

菅野先生を表現するのにふさわしい言葉が時折思い出される。一つは、“learn”という語である。“learn”という語に、“to acquire knowledge”という意味と、“to teach (a person)”という両方の意味があることを先生から教えていただいたのはつい最近のことである。菅野先生こそは、まさにこの“learn”を具現化している人であろう。また、よく耳にしたのは、将棋の升田名人の「動くこまと働くこま」の話である。「ただその場限りの、一時しのぎに動かされただけの死に駒と、最初によく考えられて打たれ、後に大きな働きをする効き駒がある」という趣旨である。将棋の駒と同じように、人間にも「動く人と働く人」がいるとのことである。菅野先生こそは、まさに「働くこま」であった。

愛知教育大学、殊に外国語教室には相当の愛情を感じているご様子であった。平日は当然ながら、休日も研究室で学問に勤しむ姿をよく拝見したものでした。時折招かれていただく英国の紅茶とお菓子は最高であった。紅茶をいただきながら、暖かい心の中にも学者としての厳しい姿を垣間見ることも度々あった。先生の卒論指導を受けた学生は、その日に課せられた水準に達するまでは帰宅を許されなかった。普段の温厚な眼射しと、妥協を許さない学問への姿勢の、両面に彼らは接したことであろう。

生活ぶりは人間味に満ち溢れていた。「貧乏ではあるが、金に困ったことはない」、というのが口癖である。その言葉には多少異論はあるが、なるほど、学生や、我々に、惜しむことなく散財していただいたことは確かである。酒をこよなく愛した先生でもある。酔うほどに楽しくなる酒である。奥様の見事な料理を囲みながら楽しい一時を過ごした同僚・学生・卒業生は数えきれない。このような状況を支えられていた奥様にいつも我々は感謝しながらご馳走になった。

自然を愛する先生でもある。大学構内に育まれた季節の恵みを充分に堪能させていた。春は筍にわらび、秋は柿、これらの季節の恵みを時節を失うことなく享受し、他の教官に分かち与えていたことを覚えている。伝聞によれば、筍採りに夢中になり骨折し、まさに、骨折り損を経験されたこと也有ったそうだ。広島の名物も随分いただいた。広島から直送の牡蠣は絶品であった。

飄々とした生活振りとは対照的な側面も持ち合わせていた。3年もの間、附属高校の校長を立派に勤め上げられ、高校教育においても真価を発揮された。当時の挨拶や、式辞の一部を最近読ませていただき、挨拶の中で、身をもって進むべき道を生徒に示そうとしていた姿が目に浮かぶようでした。その幅広い読書量と、経験に裏打ちされた含蓄のある言葉に圧倒されるばかりでした。

公私混同どころか、全くその逆の「私公混同」の日々であったように思われる。外国語教室の将来を見据えての行動が停年の日まで続いた。菅野先生が外国語教室を後にされてからしばらく経ったが、今だに、ふいっと登場されるのではと思うこの頃である。判断に困った折りには、「働くこま」である菅野先生だったらどうされるのかと思い巡らすこともある。先生が適度な息抜きをされながら、これからも新天地で精力的にご研究されることを、先生を尊敬申し上げる者の一人として願っている次第である。